柱穴の径は30～40cmと小さく、礎石立ちのものや総柱のものも認められない。簡易な建物であったことが窺える。土坑には一辺300cm前後の大形のものも認められるが、多くは一辺100～200cm前後の楕円形のものであった。規模から見て、そのまま竪穴建物に復元できるものはなく、掘立柱建物に付随するものか、貯蔵などの施設と考えられるものばかりである。中にはSK18・85など焼土・炭化物を含むものもある。一方、SK16・86などは砂質で水との関係が窺えた。SK52・54は井戸の可能性も考えられる。

遺物は15世紀代に位置づけられる古瀬戸の製品や、16世紀に位置づけられる大窯期の製品が多く出土している。伝世などを考慮しても、大窯期の製品がわずかに認められただけの吉野町館跡よりも古くに築かれたとみてよいであろう。遺物からはその後、20世紀初めまで継続して屋敷があったことが窺える。ここが水田や畑になったのは明治時代末以降、その時に不用の家財が東側の堀に捨てられたようである。

第2節　古代における安曇郡南部の様相 ― 豊科町内の発掘調査から ―

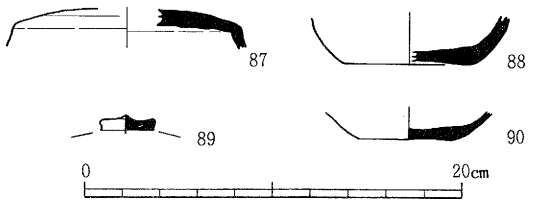
調査遺跡の概要　近年まで豊科町の平地部の遺跡については、わずかな遺物出土地が「点」として示されているだけで、その様相については全く不明であった。このことは安曇郡の南部地域全体を見ても同様で、例えば隣の筑摩郡（松本市内など）に比べればその様相はまだまだ明らかになっていない。しかし、過去3年間の吉野町（館跡）遺跡・梶海渡遺跡・鳥羽（館跡）遺跡の発掘調査によって、ようやく資料が蓄積されるようになってきた。以下にそれら遺跡の概要と、他遺跡の既出遺物をあらためて紹介し、現段階で知ることのできる古代の安曇郡南部の様相について概観する。

吉野町（館跡）遺跡　8軒の竪穴住居址が発掘された。礫混じりの褐色土中に深さ60～70cm掘り込んで構築されている。規模は一辺3m前後の小型のものと4.5～5mの中型のものとがある。いずれにも柱穴は認められない。カマドは1例北東隅に構築したものがあったが、他は東壁中央に設けられている。礫を芯にした粘土カマドである。遺物には須恵器坏蓋・坏・皿・壷・四耳壷・甕、土師器坏・盤・小形甕・甕、黒色土器坏・椀・鉢、灰釉陶器皿・椀・瓶などがある。また、緑釉陶器や鎌の出土もあった。食膳具は軟質の須恵器坏と黒色土器を主体に構成されている。

梶海渡遺跡　竪穴住居址1軒が発掘され、また、自然流路内から多くの土器が出土している。住居は一辺4mほどのもので、東壁中央に礫を芯にした粘土カマドが設けられて

いる。出土遺物には須恵器坏・長頸壷・短頸壷・甕、土師器小形甕・甕・鍋、黒色土器坏・椀・鉢、灰釉陶器皿・椀・瓶などがある。食膳具は軟質の須恵器坏と黒色土器を主体に構成されている。また、遺構外からであるが緑釉陶器の出土もあった。

その他の遺跡　町内で出土した遺物の多くは所在が不明で、そのうち古代の遺物を実見することのできた例はわずか2遺跡にすぎない。87・88は寺所の原村遺跡から出土した須恵器片である[2]。1987年、ほ場整備の工事中に発見されたもので、他に凹石、内耳土器の出土もある。87は壷あるいは盤の蓋になると思われる。88の坏は回転糸切りの厚く大きな底部（径6.8cm）から体部があまり外開せずに立ち上がっている。89・90は南安曇教育会で所蔵している須恵器で、熊倉北端という注記がされているだけで、出土地点は不明である。89は蓋のつまみ、90は坏である。回転糸切りの小さな底部（径5.2cm）から薄い体部が大きく外開している。焼成は良好である。



挿図37　町内遺跡出土遺物実測図

また、『南安曇郡誌』には荒井遺跡出土遺物として土師器坏と甕が紹介されている。その記述からは、食膳具に黒色土器・軟質の須恵器坏と考えられるものがある。

遺跡の分布　これらの遺跡は梓川の形成した段丘丸田面の端に、ほぼ南北、一直線上に分布している。しかし、これより東の低位面にあたる高家地区でも古代の遺物の出土が報告されているので、実際には自然流と湧水を活用できる微高地を選んで小規模な集落が散在的に広がっていたと見るべきであろう。

遺物の検討　出土遺物は筑摩郡出土のものと大差なく、土器群の変化は同じにとらえることが可能である。ほぼ完成しているその編年[3]にあてはめると、原村遺跡出土のものが8世紀の終わりから9世紀の初頭に位置づけられる可能性があるものの、他は概ね9世紀の中頃から後半に位置づけられる。

黒色土器と軟質の須恵器坏が食膳具の中心となること。土師器に武蔵型と呼ばれる胴部にヘラ削りを施した甕が少量ながら存在すること。発掘調査した3遺跡の出土遺物中にいずれも墨書土器が認められ、この時期に敷衍した様相が窺えることなどは筑摩郡内の様相と同様である[4]。一方、北信地方に分布する鍋形の甕が認められる[5]ことなどは、この地域の特徴と言えるかもしれない。また、吉野町（館跡）遺跡・梶海渡遺跡、三郷村の犬塚遺跡・

楡道下遺跡などからは緑釉陶器の出土が報告されている。いずれも点数は少ないが、そのあり方が、今後注目されよう。

沖積地の開発　豊科町に発見された古代集落は、その出土遺物から概ね9世紀の中頃から後半に位置づけられた。安曇郡南部の遺跡のうち、出土土器が図示されその内容を知ることのできる堀金村岩田天神南遺跡・古城下遺跡、三郷村堂原遺跡などもほぼ同じ時期のものととらえられる。また、松本市島内地区の遺跡もほぼ同じ様相をしている[6]。この時期を画期として広く沖積地の開発が進んだことがわかる。資料の多い筑摩郡内では、この時期、台地上や低位の自然堤防上など最も広い範囲に集落が展開したことが指摘されている[7]が、同じことがこの安曇郡内でも認めることができた。一方、安曇郡の中でも、たとえば八原郷に比定される穂高町矢原地区の遺跡と比較すれば、そのあり方が対照的であることに気づく。すなわち矢原地区の遺跡は幾度かの洪水に見舞われながらも、弥生時代あるいは古墳時代から長く継続してあったのに対し、南部地域の遺跡は9世紀の中頃から後半に現れ、しかも多くは短期で消えているのである。

今後の課題　古代における安曇郡南部の様相を概観したが、資料が少なく具体的な姿を復元するには至らなかった。集落構造と景観、沖積地の開発と住吉庄への展開の過程、そして考古学的には積極的根拠を欠いている安曇郡高家郷の比定について[8]など、今後の資料の蓄積に期待したい。

第3節　中世～近世初頭における様相―出土遺物からの概観―

町内における中・近世遺跡の調査　1986年に㈶長野県埋蔵文化財センターが調査した中曽根の上手木戸遺跡、1990年以降3カ年に豊科町教育委員会が調査した吉野町館跡遺跡、梶海渡遺跡、鳥羽館跡遺跡と、豊科町内ではここ数年の間に中世から近世にかけての遺跡の発掘調査が4件行われた。これらは、それぞれ居館・村落・寺院関連の遺跡と性格づけすることができるかと思う。以下にそれら遺跡の出土遺物から窺える様相を概観する。

上手木戸遺跡　中曽根地籍を中心とした広い範囲の微高地上に所在する。中央道長野線の建設に係り、その東縁が発掘調査された。その結果、中世には竪穴住居址を中心に大小の土坑群が分布すること。近世では掘立柱建物址を中心に、溝址を狭んで北に畠址が分布することなどが明らかになった[9]。